



一片の氷、玉壺にありや？

ひょう しん

ぎよく こ

——公文書界隈を徘徊する——

ふくい
福井 ひとし

第六回

王臣蹇蹇たり

けんけん

「公文録」の時代

本稿の紹介

唐の詩人・王昌齡は赴任先の辺地から、友人たちに言い送った。「一片の氷心、玉壺に在り」（おれは、ひとかけらの氷のように透明な心を、玉のように穏やかな精神の中に入れた——そんな澄み切った気持ちで今はいと）と。

そんな気持ちでいることは、欲望や悩みに汚れた生身の人間には簡単ではない。しかし、文書にサインや押印

する、その一瞬の中になら、透明なものが見つかるかも知れない。過去の歴史の一面に、誰かの透明な思いが残っているのではないか・・・と思って、公文書の森を徘徊します。今日は何か見つかるでしょうか。

花咲爺は「花神」という

司馬遼太郎さんの作品、といえば、ある年齢以上の方は、みなさん人生のある時期に憑りつかれたように読んだ記憶があるのではないかと思います。今となつては司馬史観には言いたいこともたくさんありますが、通勤時間も職場でも読み続けるような、夢中になれる時間をくれたことへの

感謝を述べ尽くすことはできないと思います。

その司馬さんの名作「花神」の解説の中に、主人公を紹介して、たいへん印象深い言葉があります。

花神とは中国のことばで、花咲爺を意味する。日本全土に革命の花が咲き、明治維新の功業が成るためには、花神の登場が必要であつた。

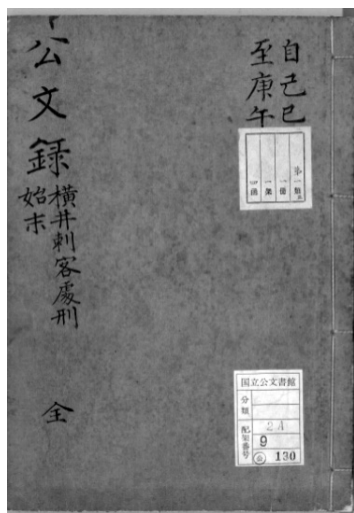
この花神が大村だ、というのですが、このフリーズを書いたのは司馬さん自身ではなく、解説を執筆（昭和五二年）した当時毎日新聞論説委員の赤松大麓氏だそうです。

さて、一〇月は巷ではハロウィンで盛り上がると思うのですが、ハロウィンには死神に連れ去られた魂も帰ってくるとか。中国では「死神」のことを「走無常」といいます。あの大きな鎌を持ったガイコツのイメージではなくて、「無常」死の使い走り、というような語感です。それでは、今月は、わたしが「花神」ではなく「走無常」となつて、これから一〇人を死なせてみましょう。

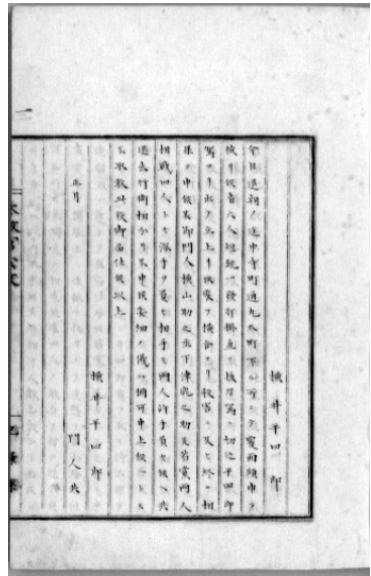
明治二年 一月五日 京都寺町

明治二年の正月、明治天皇は東都巡幸から帰られて、京都にいます。函館にまだ幕軍が立て籠っているという不安定な時期、御所に正月の初参内を終えて、とある初老の男が帰宅する途上、その駕籠に向かって、六人の男が襲い掛かる――

イの①は、太政官が整理した「公文録」から、小楠・横井平四郎の暗殺とその犯人の処刑に関する文書をまとめた一冊を持ち出してきました。「公文録」は、明治元年から一八年までの、太政官が各省との間で授受した文書で、年次別・機関別、時にこの冊のように事件別に編纂したもので、総冊数四〇〇冊を超えるものです。明治前期の政府のすがたを今日に伝える極めて重要な資料として、重要文化財に指定されていますので、国立公文書館本館の地下書庫にあります。が、実際には、「持ち出して」くることはできず、現物は利用制限されていてデジタルで見ることができません。なお、「公文録」には副本があり、字がよみづらいものもあるのですが、こちらは現物を見ることができます。



イ―① 「公文録」明治二年～三年「横井刺客処刑始末」全「表紙」



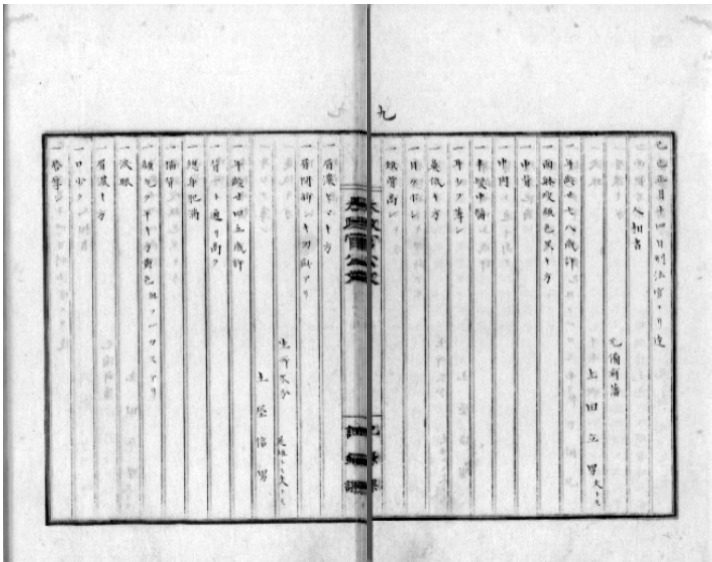
イー② 平四郎退朝ノ途中殺害ニ逢候儀門人届

横井小楠は、肥後藩出身の幕末の思想家、改革家、この時数え年六一歳、明治新政府の「参与」の職にありました。イの②を見ていただくと、

今日（正月五日）、退朝の途中、寺町通丸太町下るところにて、覆面頭巾を被り候者六人、短銃一発打ちかけ、ただちに抜刀駕に切り込み、平四郎駕より出て立ち上がり候処を横合いより殺害に及び・・・

と襲撃の様子が書かれています。

このあと、門人たちの防戦に関わらず首を斬られ、犯人に持ち去られようとしたが、追いかけたところ首を投げつけて寄越した・・・などの居合わせた人たちの報告書があります。これは省略。



イー③ 人相書公布

襲撃者六人のうち、負傷して逃げ遅れた柳田直蔵が捕縛され、その供述から実行犯の身元が判明しました。イの③は八日付けの「賊人相書き」冒頭部分です。

イの③は主犯格の二人が掲げられていますが、一人目は

元備前藩 上田立男

一 年齢二十七歳許ばかり . . .

最終行（左側二行目）に

一 眉間新しき刀疵あり

とのこと。

二人目は、

生所不分明 土生信男

一 年齢二十四五年許 . . .

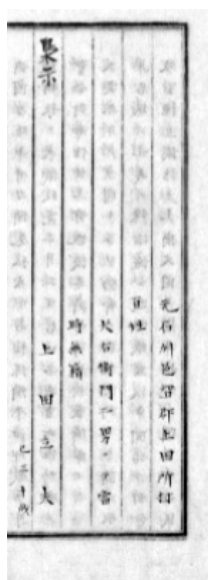
一 総身肥満

そのほか、猫背とかソバカスアリとか涙眼などの特徴が書かれています。

その後、調べが進むと、上田立男は「上田立夫」で石見のひと、土生信男は「土屋延雄つちやのふお」で、こちらが備前のひと、ということが分かってきます。なお、この土屋延雄は本名・津下四郎左衛門つげしろうざえもんといい、後に森鷗外がその息子・津下慶太と出会って、『津下四郎左衛門』という歴史小品に、維新に裏切られたその人への同情を寄せることになるそうです（一坂太郎「暗殺の幕末維新史」一七九ページ。この本ほんとおもしろかったです）。

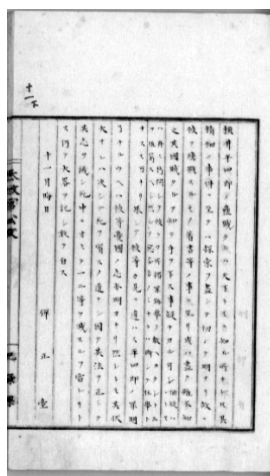
六人の実行犯のうち五人は捕まり、口書きがとられて、刑部大輔・佐々木高行らによって擬律（法のあてはめ）も進みます。イの④は上田立夫の「口書き」で、赤字で「梟

示し、斬刑の上さらし首、と書かれています。



イー④ 上田立夫
外八人口書（一部）

だが、断罪はなかなか行われない。各方面から助命嘆願がなされ、中でも有力だったのが、刑法犯の搜索や裁判・行刑にも関わる弾正台です。弾正台は、熊本で小楠の著という天皇の万世一系を否定した「天道覚明論」（確実に偽書とされる）を手に入れたとして、小楠殺害は義挙であつたと主張、明治二年一月末、イの⑤の意見書を提出した。



イー⑤ 弾正台意見上陳

冒頭、「横井平四郎の蠱賊たるは天下共に知る所なれども、其精細の事件に至ては探索を尽して初めて明なり：」

とずばつと来ています。「斬奸状」でもどこかの落書きでもなく、政府機関である弾正台の太政官への発出文書です。新政府徴士の横井小楠を「蠱賊」と断じ、以下、その殺害は「断じて壮挙と為すも可なり」の行為であつて、犯人たちは憂国の志明らかだが、犯罪は重大なので、死一二等を減じるのが適切である・・・と続きます。

小楠の暗殺もその裁判への横やりも、開国派に対する攘夷派の反発といわれ、圭室諦成さんは人物叢書の「横井小楠」において暗殺から断罪引き延ばしまで、黒幕は刑部官知事・大原重徳と断じていますが、弾正台側で大忠・海江田信義や偽書を探し出してきた大巡察・古賀十郎といった人物が同調したものと名前を挙げています。

海江田信義はもと有村俊斎と名乗り、寺田屋事件や生麦事件、さらに戊申戦役での活躍で知られた薩摩精忠組の幹部、井伊大老の首を取った有村治左エ門の実兄、筋金入りの尊王攘夷主義者です。

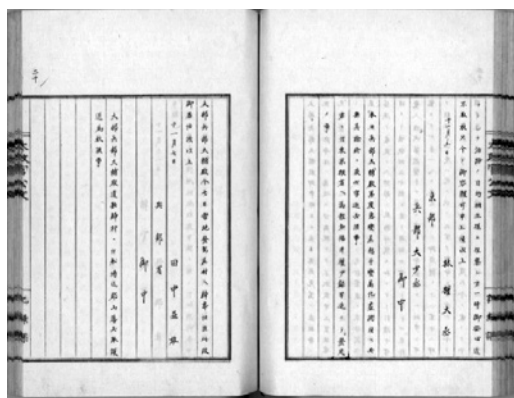
横井小楠殺害犯たちは、明治三年一〇月一〇日に太政官にて断罪、刑部案どおり五人に梟首が実行されました。ただし、この日も刑に立ち会う弾正台側の職員が遅刻し、刑の執行が遅れた旨が記録されています。

やっと一人、死なせました。この後はもう少し手短にや

ります。

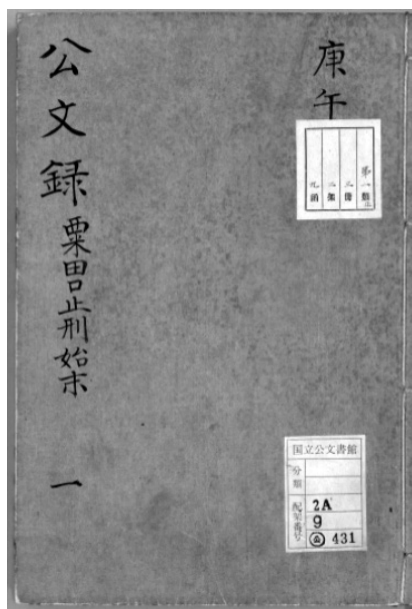
明治二年十一月五日 大阪府

明治二年六月版籍奉還、一〇月には明治天皇の東京再幸が実施され、太政官も東京に移されます。その矢先、大阪から新政府、特に長州藩関係者に衝撃的な情報飛び込んできました。現役の兵部大輔・大村益次郎が死去。なお、この時期はまだ新暦への切り替えが行われていませんので、日付は旧暦になります。



口一①「公文録」明治三年第一一六卷「栗田口止刑始末」—「大村兵部大輔容赫書上申並逝去届」

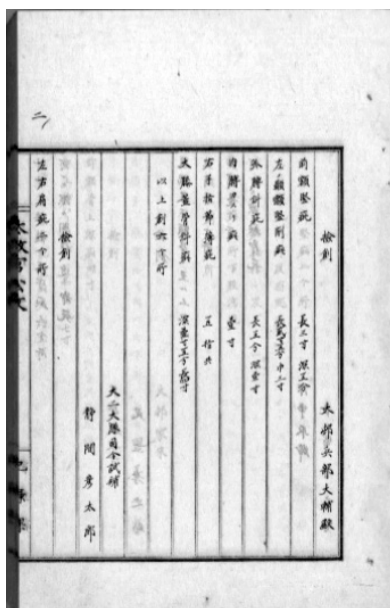
ロ―①の右側、十一月五日付
本日、兵部大輔殿再度急変差起、千変万化^{じゆつをてし}尽^つ術^を候え
共、無^{そのせんなく}其詮、夜七字逝去候事。
この資料は、ロ―②の冊子に入っています。「大村益次郎暗殺」ではなく「粟田口止刑^{あわたぐちとけい}」事件？なぜそんな題名になっているのでしょうか。



ロ―② 同上「表紙」

まず、事件の発端です。ロ―③は兵部省からの太政官宛ての上申書。九月四日夜、
退省後、旅宿へ狼藉者乱入・・・大輔深手負い申候・・・とのこと。場所は京都市の木屋町、旅宿とありますが、

山口藩からは、木屋町二条下るの山口藩抱え屋敷だと口上が出ています。長州関係者用に確保していたのだろうと思われます。



ロ―③ 同上「死人疵人弾正台検察書」

居あわせた静間彦太郎らが即死、深手を負ったものの大村の傷は幸い致命傷にいたらず、大阪のボードウインのもとで加療することとなったが、右足の傷が思わしくないため一〇月二七日、右足切断手術を行う。その後、容体が変化し、急死しました（敗血症という）。数え年四五歳。

実行犯は長州藩関係者や加賀藩士など十三人とされ、当日護衛に斬られた者、自刃した者、さらに長州の神代直人^{こしろなおと}など藩の手によって斬罪せられた者を除き、一二月二〇日

この弾正台の対応は問題になり、弾正台職員の取り調べが行われました。横井小楠事件でも名前の出てきた古賀十郎は、翌年の弾正台の組織改正の際に解任されます。なお、司馬遼太郎先生は黒幕は「海江田信義」と断定しておられますが、これを疑った大久保利通からの質問に、海江田は「実行犯の何人かは旧知だったが、自分は大村が京都にいること自体知らなかった」と吐露しているようです。

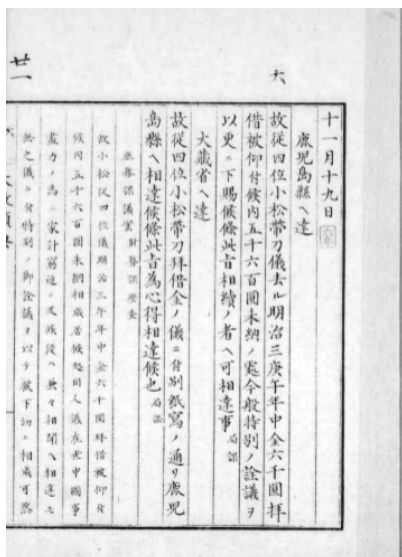
古賀の方はその後、翌明治三年四月二十九日、長州藩の諸隊反乱とその後の混乱に関わつたとして郷里久留米で捕縛、東京に送られ（ロー④）、処刑されました。同時期、長州の大栗源太郎（だいりげんたろう）などの疑いで、柳川藩諸士、肥後の河上彦斎（わかつかみ）（幕末の名高い「人斬彦斎」）も捕縛、処刑されます。ちなみにこの一連の事件は、明治三年の「公文書録」の中でも、「山口藩隊卒騷擾始末」の冊子に入っています。

政府と攘夷派の暗闘が続いている中ですが、こういうまともな人は、どうせ死ぬならやつぱり畳の上で死なせてやりたいものです。元薩摩藩家老で大政奉還、戊辰戦争、そ





ハ—② 明治二七年「贈位内申書」中「小松清廉履歴書」



ハ—① 太政類典第二編 明治四年〜一〇年 第三〇六卷 理財二六「鹿児島県土族故小松帯刀拝借金下賜」

して維新後の外交関係に活躍していた前玄蕃頭・小松帯刀が病死しました（実際は一八日との説もあります）。数え年三六歳。その時点ですでに何の官職も持っていなかったためか、死亡に関する直接の記録は「公文録」等で見つけることができませんでした。ハ—①は、「公文録」ではなく「太政類典」から持ち出してきています。

「太政類典」は、慶応三年から明治一四年までの「太政官日記」や「公文録」などから先例、規則類を集めて、制度、官制などの一九部門に分類の上、年代順に編集した膨大な「先例集」です。執務の参考にするつもりだったのだと思いますが、当時どれほどの人がこれを使いこなせたのか心配になるぐらい大部なものです。現代になってみると標題には検索が利くのでたいへん使い勝手があります。「公文録」では拾えない特殊事例を残してくれており、「小松帯刀」の検索で取り出せるので、たいへん便利。ただし、撮影時期が古いので、デジタルアーカイブ版は白黒で少し見づらいです。

なお、「太政類典」には「草稿」があり、「草稿」を並べ直して最終稿にしますので、「草稿」と「太政類典」本体との違いを比較するのがまたおもしろい、のですが、そんなことやっているとキリがないので、閑話休題。

ハ—①は、暗殺の記録ではありません。「借金の処理」の記録です。小松死後三年後の明治六年一月一九日付け

で鹿児島県に対して、太政官から、

（小松帯刀が）明治三年・・・金六千円拝借被仰付候内、五千六百円未納の処、今般特別の詮議を以て更に下賜候条、此旨相続の者へ可相達事。

つまり、小松帯刀が亡くなった時（彼名義の借金があり、小松帯刀が生前に依頼した形を取って）六千円を貸し付けた、（その後、四百円が返却されたが、残りの）五千六百円はまだ返ってこないのだが、今回、特別の考察により、（五千六百円分を貸し付けではなく）さらに下賜（して借金棒引きに）することにしたので、そのことを遺族に知らせてください、と言っています。

借財の経緯などはよくわからないところもある（薩摩藩時代、小松の名前で武器や外国製品を多く買い込んでいたらしいし、薩摩国内で小松の名前で事業を起こしていた者もあった）そうです。

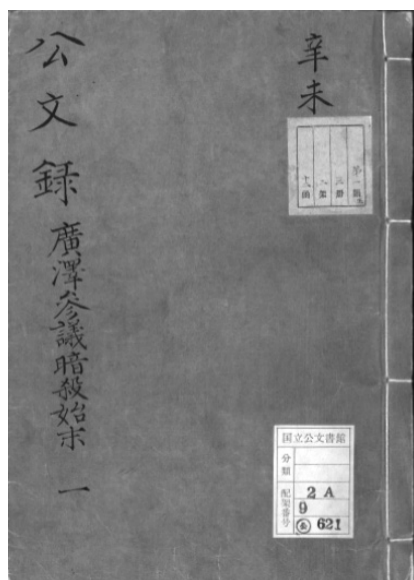
——はたしてこれは帯刀の債務だったのだろうか。（高村直助「小松帯刀」二七九ページ）。

ハ―②は、明治二十七年に遺族（小松清直）から提出された「履歴書」。これだと「七月十日病卒」になっています。直前に東京に移居して太政官に出仕するよう命令があったらしいのですが、確認できません。

明治四年一月八日 東京麹町富士見町

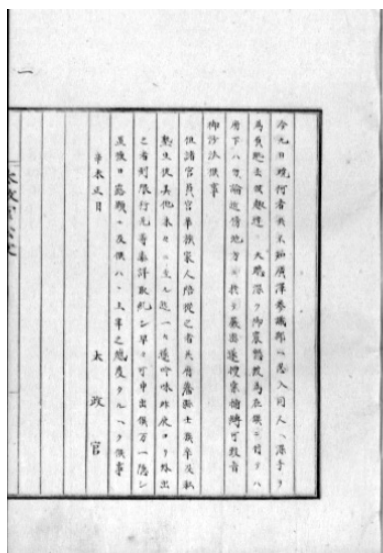
この日は、朝八時より講武始めの儀があり、右大臣三条実美をはじめ廟堂の高官が出席した。参議・廣澤真臣（まひろさわまね）（まおみと読んだという一坂太郎先生の指摘があり（「廣澤真臣の生涯」、わたしもそれでいいやと思うのですが、とりあえず歴史辞典などのルビに従います）もこれに出席しています

その日の夜（九日未明）、廣澤真臣邸に何者かが侵入し、妾・かねと同衾中の真臣を斬殺した。数え年で三九歳。



二―① 公文録明治四年「廣澤参議暗殺始末」一「表紙」

この事件、いろんな人が疑われるのですが、とうとう犯人は判明せず。諸説ありながら、現代まで迷宮入りしています。



二—② 同上「広沢参議へ深手為負逃去候賊搜索捕縛ノ儀御沙汰書并東京府町触」

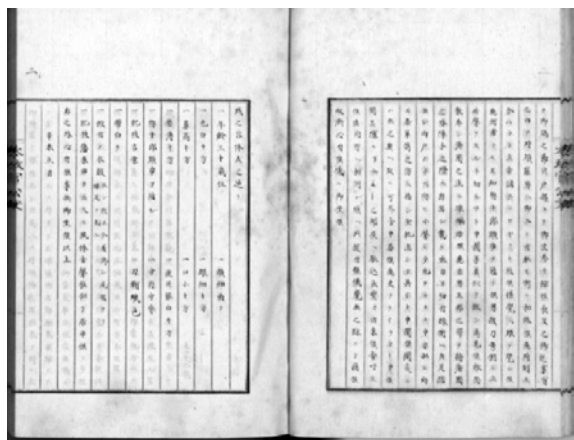
二—②に死亡の連絡があります。

今九日晩、何者か不知、廣澤参議邸に忍入、同人へ深手を為負逃去候趣、達天聴、深く御震怒被為在候。東京府内だけでなく付近の地域も含めて、厳しく犯人を搜索せよ、とのこと。

しかし、犯人は捕まらない。背後関係もわからない。まづは事件の現場に居合わせた妾のかねが事件直後の供述で、「宗十郎頭巾をかぶりさうろう男」の単独犯、

旦那の帯を持ち蒲団の外障子の際へ引き出し幾太刀か切りつけ、縁側へ片足踏み出し雨戸の方へ向かい小声にて「死(に)た、死(に)た」と申し・・・

そのあと自分に向かってタンスの中の金目のものを寄せせといったが、そこにはなく外の部屋に取りに行かなければならない、と言うと、それならいらない、と言って逃げ去った・・・と妙にリアルな証言をしています。(二—③)



二—③ 同上「広沢家従者取調聞書概略」中「かね聞書き」

左ページに人相が書かれていて、三〇歳ぐらい、肥後なまり、のほか、一番最後の「一」に、一 肥後藩米田という人に、風体音声能く似て候

とあります。なんと、もう犯人わかったようなものじゃないですか！

と思いましたが、肥後藩士・米田虎雄は、直前に廣澤から柳川藩神職・広田彦磨の捕縛の命令を受けており、その命令書も持っていた。相手の広田が怪しいので当然捕縛、広田は山口藩士の邸宅で捕まった、というから、ここにも裏に何かありそうです。米田に似ていたなんてかねの供述も変ではないか、と思われ、かねをきつく取り調べたところ、目撃情報は全くの虚言だったとのこと。

その後、かねが宿していた廣澤の子を無事産んだあと、きつつい調べをしたところ、ついに自分と不倫関係にあった家令の紀田正一の犯行だと自白、山口に帰っていた紀田をこれまたきつついお取り調べをしたところ、かねとの関係を知られたので廣澤を殺したということが判明：：：したのですが、紀田は裁判で自白は拷問に耐えかねた拵え事だと言いつつ張った。このため本件については太政官等から裁判に参加する「参座制」といわれる特別の裁判手続きが取られます。廣澤故参議暗殺事件特別裁判規則が上請され、原告官（檢察側）、弁護官（司法省内から二人任命）、参座官一二人から成る特別裁判が行われて、結果、紀田は無罪

放免されることになりました。その後も搜索は続くのですが、とうとう今に至るまで、犯人は判明していません。しかし、当時、山口藩の諸隊反乱の鎮圧をはじめ、各地で攘夷派の取り締まりが進められており、事実、木戸や大久保はそのために山口・鹿児島に出張中であつたことなど、攘夷派の関与は疑えないのではないかと公文書館でこの問題を追いかけているIさんと話していると、わたしもその気になってきました。

明治六年五月五日 皇居（江戸城）

新暦になっています。この日は要人が亡くなったわけではありません。江戸城内で出火し、建物とあわせて、太政



ホー① 「公文録」明治六年第三卷「明治六年五月各課伺」中「皇城炎上記録焼失二付御達願伺書謄写可差出旨省府県ヘノ達」

官や宮内省が保有していた文書類（江戸幕府から引き継いだものを含む）が多数焼失してしまいました。一般に「皇城火災」と呼ばれる事件です。

ホ―①は、五月六日付、皇城火災の翌日に、太政官正院から、正院記録大半焼失につき、「建省以来の伺・届及び旧官省より引継いだ文書について、漸次に謄写して差し出してください」と言っています。五月八日に施行され、各省に伝達されました。

本人が押しているかどうかは別として、右肩のはんこはおもしろいですね。



ホ―② 同上、一部

ホ―②の上から、三条、大隈、西郷、板垣、（不明）、大木、後藤。不明は誰でしょうか。この時期のメンバーは、あとは木戸と江藤ですが木戸は外遊中……。

ところで、イ―ニと違って、字が「きれいではない」と思われませんか。実は、イ―ニは、この皇城炎上事件で焼けた文書を、各省などから再提出させて「再生」したもの

なんです。本来は、ホ以降のような文書を編綴していたはずなのですが、「再生」は清書されているので実にきれいな文字になっています。

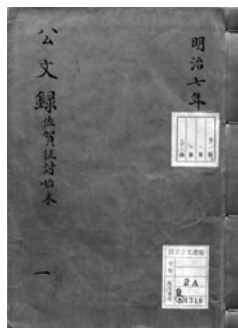
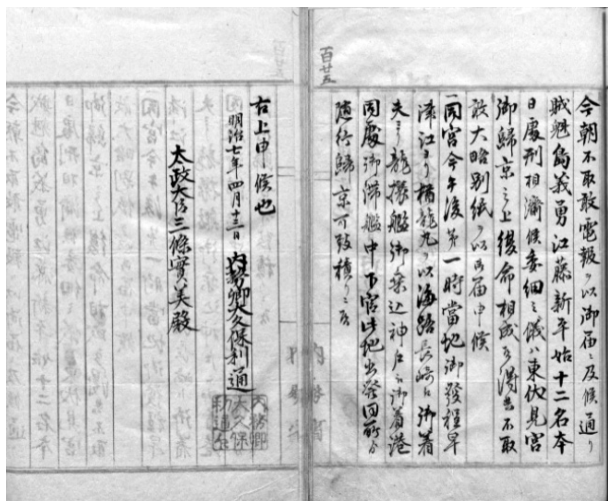
明治七年四月一三日 佐賀県

明治六年一〇月にいわゆる「征韓論政変」が起こり、ホ―②に押印していた参議たちの多くが下野しました。年明けの七年一月一日、赤坂喰違坂で右大臣・岩倉具視が襲撃される事件が発生。岩倉は刀傷を負いながら四谷の外濠に落ちて襲撃者から逃れ、一命をとりとめています。実行犯九人が捕縛されますが、いずれも征韓論政変までは各省に勤めていた職員でした。

この事件が係属中の二月、佐賀で士族反乱が起こります。決起した憂国党は、長崎で静養していた前参議・江藤新平、佐賀鎮撫に來たはずの島義勇らを担ぎ上げ、熊本鎮台兵を破るなど戦果を挙げましたが、二月下旬には戦局不利となり、江藤は鹿児島、西郷隆盛に助力を求めるため（ほぼ敵前逃亡ですが）海路薩摩に向かい、西郷に助力を拒まれると高知に向かいますが同地で捕縛、佐賀に送致されて臨時裁判所で「梟首」となります。

この事件は、ホ―①に記録されています。

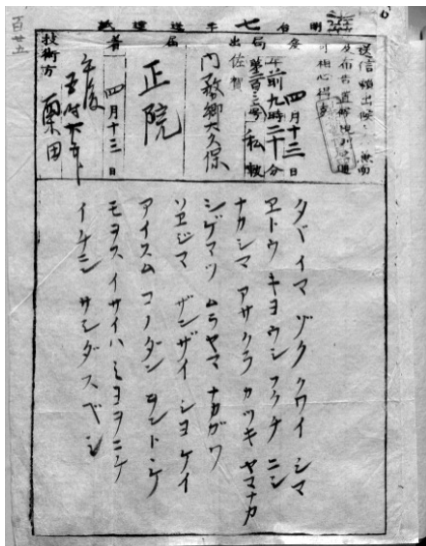
ホ―②によれば、四月一三日、佐賀に入っていた政府側の大久保利通らは佐賀臨時裁判所を設置して、



へー①「公文録」明治七年二九五巻「佐賀県征討始末」一「表紙」

へー②「公文録」明治七年二九九巻「佐賀県征討始末」五「江藤新平始処刑済并擬律共内務卿より電報」

ただいま、ぞくかい しま、えとう きようし (梟示)、
ふくち、にし、なかしま・・・ざんざい (斬罪) しよけ
いあいすむ・・・

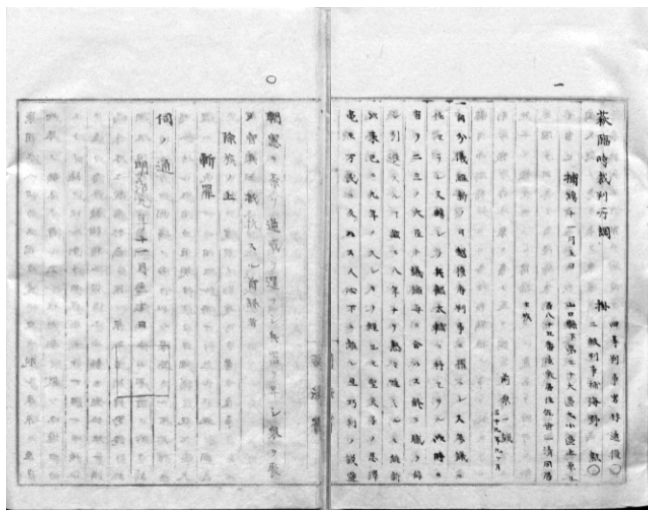


へー③「公文録」明治七年二九九巻「佐賀県征討始末」五「江藤新平始処刑済并擬律共内務卿より電報」

今朝不取敢電報を以て御届に及候通り、賊魁島義
勇・江藤新平始(め)十二名本日処刑相済候・・・
ちなみに、この「電報」は報告として体裁を整えたもの
らしく、同じ文書の最後に第一報の原書(へー③)が綴ら
れています。こっちの方が生々しいかも。

明治九年 二月三日 萩

萩の乱の首魁・前原一誠が斬罪を執行されました（ト―①）。享年四三。この事件については、ト―③がありますが、公文録のあちこちにも関係文書が入っています。



ト―①「公文録」明治九年・司法省付録・第七五巻「萩熊本秋月等賊徒口述書」一中「前原一誠」

師の吉田松陰が、

・・・・その才は実甫（久坂玄瑞）に及ばず、その識は暢夫（高杉晋作）に及ばず、しかしてその人物の完全なること、二子また八十（前原一誠）に及ばざること遠し。

と評した前原一誠ですが、大村益次郎の後で兵部大輔となるも国民皆兵の考えに承服できず、出勤しなくなってしまう、職を辞して帰郷。明治九年一〇月二六日、秋月や熊本での反乱の知らせを受けて挙兵した不平士族らに、二八日に合流しました。

事件の発生については、ト―②が伝えています。

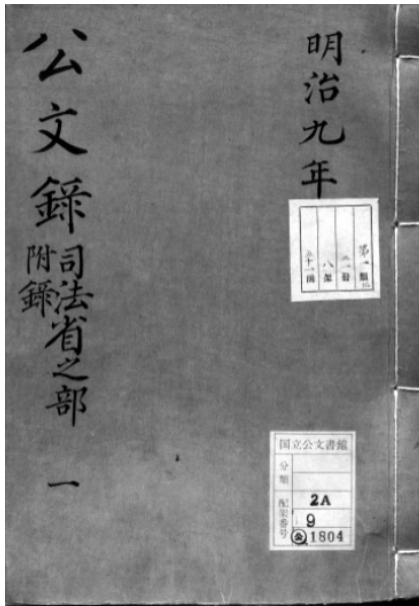


ト―②「公文録」明治九年・第一〇巻・九年一〇月・寮局「十月三十日各府県達書案」

がんばって読んでみると、

本月（明治九年十月）廿八日、山口県士族前原一誠・横山俊彦・奥平謙助等百余名徒党を集合候に付き県庁より解散を命じ候処、遂に兵器を携え^{これ等}公金を奪い石州地方に向け脱走候旨、同県より電報有之。...

やはりこれも佐賀同様、電報で連絡しあっているようです。それにしても、この決裁も、はんこがおもしろいですね。大臣のところに、三条と岩倉、参議の並びには大隈、寺島宗則、大木、次に「博文」（伊藤博文）とあり、その下が「黒」（黒田清隆）、大史のところは、巖谷一六や後の大審院判事・牟田口通照などが押印しているようです。



ト③ ト①の「表紙」

口供書などを読むと、彼らは萩での戦闘を避け、前原を担いで天皇に直訴するため山陰道を進もうとしたようなのですが、いろいろ混乱もあって萩に戻り、一月初旬までには広島鎮台兵らに鎮圧されてしまったようです。前原らは別途、海路東京に向かおうとして、出雲の宇龍で逮捕されたとのこと。

明治一〇年五月二十六日 京都

内閣顧問・木戸孝允が京都の別邸にて病死しました。木戸が意識を失った時期には、既に熊本城の包囲は解け、西郷は人吉に後退していましたが、意識朦朧とする中で「西郷よもういいかげんにせぬか」と言ったというのは有名です。あまりにもかっこいいので本当かどうか・・・享年四五。

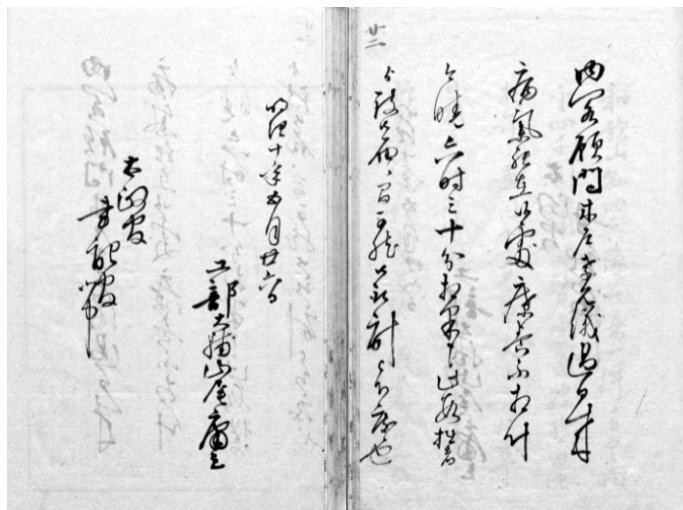
チー①は、「公文録」に綴じられていた木戸の死の報告です。

がんばって読んでみます。

内閣顧問木戸孝允儀過日来病氣罷在候処、療養不相叶今晩六時三十分相果申候。此段拙者ゝ致御届候間可然御取計被下度候也。

明治十年五月廿六日 工部大輔 山尾庸三
太政官京都留守中

と読み取りました。
「内閣顧問・木戸孝允儀、過日来、病氣まかりあり候ところ、療養あいかなわず今晚六時三十分、あい果て申し



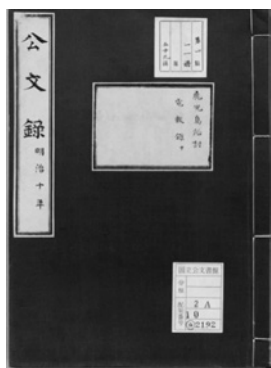
チー①「公文録」明治一〇年一四五巻「行在所公文録」八「木戸内閣顧問病死届」

候。この段、拙者よりお届けいたし候間、然るべくお取り計らい下されたく候なり。」
伊藤博文や井上馨と一緒に英国留学に出かけた長州ファイブの一人、山尾庸三が、この時期木戸の世話をしていたことがわかります。

明治一〇年九月二四日 鹿児島

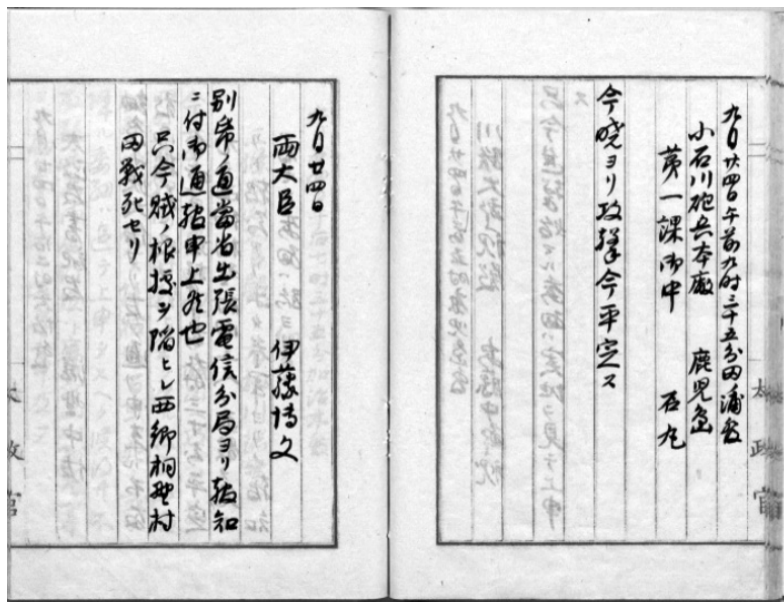
この日、城山の戦いで西郷隆盛が亡くなりました。享年五一。西郷さんのことをいろいろ考えても答えが出ません。なぜこんな稚拙な反乱を起こしたのかと不思議なのですが、江藤淳さんの「完本 南洲残影」がその「全滅滅亡」の意義を書いておられるのを読んで、とりあえず納得しています。

明治一〇年の公文録の中には「行在所公文」や「征討日記」など西南の役関係の文書が多数含まれていますが、そ



リー①「公文録」明治一〇年一七〇巻「鹿児島征討電報録」十「表紙」

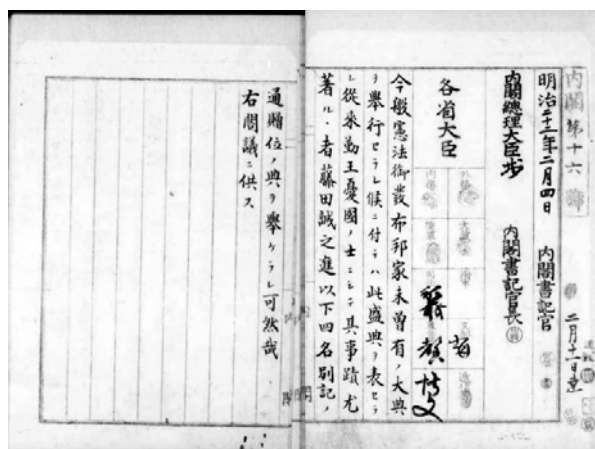
の中の「電報録」から、九月二四日の電報を見てみます。



リ―② 同上 九月二四日電報

リ―②の右側、「午前九時三五分 今晩より攻撃、今平定す」。左側最後には、「西郷桐野村田戦死せり」。

明治二二年、「逆賊」西郷隆盛の位階が回復されます。総理は黒田清隆、内務大臣は西郷の首を確認した山県有朋、陸軍大臣は従弟の大山巖、海軍大臣は実弟の西郷従道、左下に枢密院議長の伊藤博文。彼らはどんな思いでここに署名しているのでしょうか。



リ―③ 「公文類聚」第一三編明治二二年第七巻「賞恤、旌表、賞賜追賞等」中「故藤田誠之進外三名二位階ヲ贈ラル」。この時位階を贈られたのは、藤田東湖、佐久間象山、吉田松陰、西郷隆盛。ちなみに、「公文類聚」は「太政類典」の引継ぎで、明治から昭和二九年に至ります。これも四〇〇〇冊を超えています。

明治一一年五月一四日 東京紀尾井坂

先だって、赤坂見附に所用があつて行つてまいりました。弁慶橋から四谷方面に向かうと、右手に「贈右大臣大久保公哀悼碑」が立っています（ヌー①）。この碑の場所より現在の弁慶橋寄り、ということですから、ヌー②のあたりが現場でしょうか。

おそらくこのあたりで、内務卿・大久保利通が石川県士族・島田一郎らによつて暗殺されました。四九歳。岩倉具視を襲つた喰違坂の変では、この写真の撮影者から後方道が登坂しながらカーブするあたりが、馬車の速度が緩む

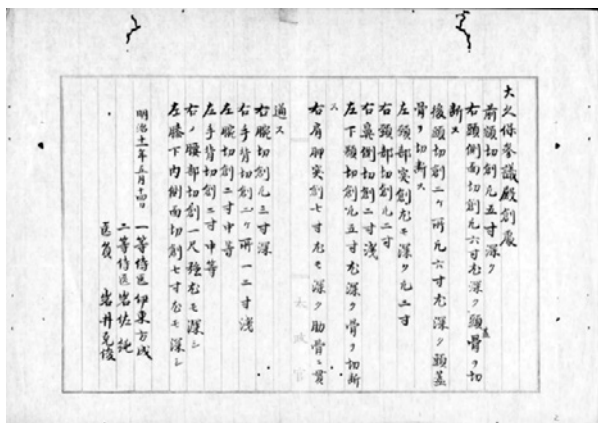


ヌー① 「贈右大臣大久保利通公哀悼碑」写真（筆者撮影）



ヌー② 紀尾井坂の現現場周辺写真（筆者撮影）

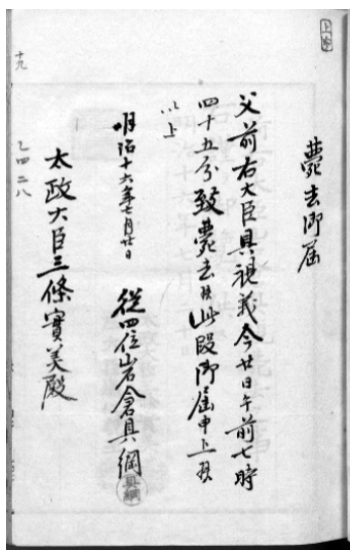
ことから恰好の待ち伏せ場所だったようです。しかし、岩倉が一命をとりとめたように外濠に逃げる事ができる点について襲撃者たちは考えて、それより手前をその場所に選んだのでしょうか。ヌー③に子息の大久保利和から、創傷のあらまし、刺客たちの容赦ない斬撃の様子が太政官に報告されています。



ヌー③ 「諸雑公文書」中「大久保利通死届」

明治一六年七月二〇日 東京

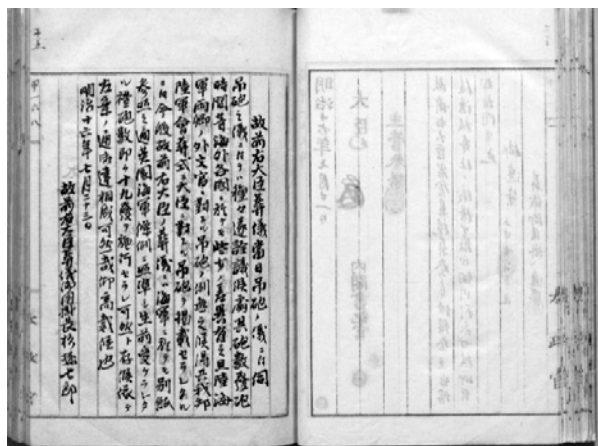
前右大臣・岩倉具視いわくらともみが薨去します。享年五九。ル―①にあるように、長女の婿である具綱が報告、家督を継ぎました。(ただし、翌年「隠居」して義弟(具視の二男)具定に家督を譲っています。)



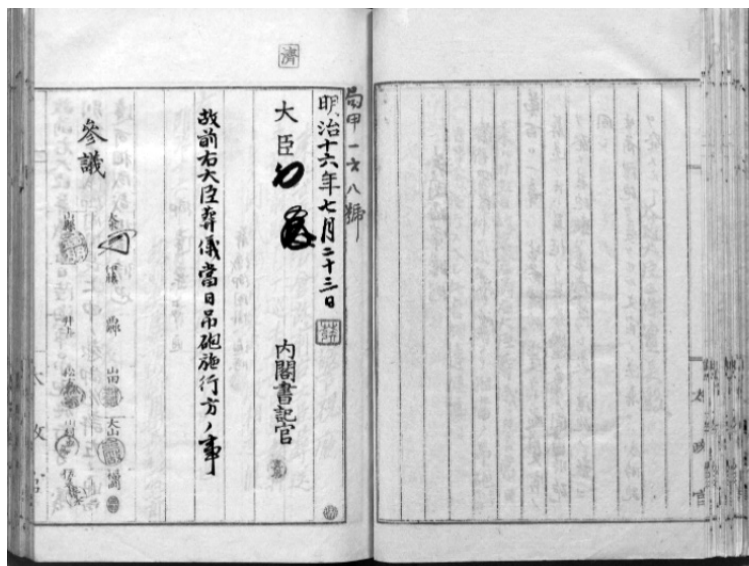
ル―① 「公文録」明治一六年第二〇五卷 明治一六年「官吏雜件七月」全「右大臣岩倉具視薨去の件」

岩倉の葬儀は「国葬」として行われ、葬儀に当たって、「礼砲」を撃つことになるのですが、これについて議論があったようです。ル―②の、故前右大臣葬儀御用掛長になった杉孫七郎の「伺い」によれば、陸海軍卿に対するもののほ

か、文官に対する弔砲の例がない、そこで、今般故前右大臣の葬儀には、海軍に於いても別紙参照の通、英国海軍条例に照準し、生前受けられたる礼砲数、即ち十九発を施行せられ可然しなぐと存じ候。
というのが杉の案で、三条太政大臣を筆頭とする太政官に伺いを立てています。



ル―② 「公文録」明治一六年第五卷六月～七月「太政官内閣書記官局等」中「前右大臣岩倉具視薨去に付葬儀当日弔砲の件・伺い」



ル—③ 同上、決裁

ル—③を見ると、この案どおり決裁されています。ところが・・・。

この決裁、大臣のところの花押は、上が三条太政大臣、下が有栖川宮左大臣。それはいいのですが左端の参議たちの押印を見てください。



ル—④ 同上、決裁 (一部)

川村純義海軍卿と福岡孝弟文部卿は明らかにハンコを反対に押しています。意図を確認してみたいところですが、今回はここまで。

王臣蹇蹇

なんと一〇人死なせました。以上の方々は、山脇之人が「維新元勳十傑論」(明治一七年)に挙げた一〇人です。維新以前に亡くなった坂本竜馬が入っていないとか、負け組の勝海舟は入っていないとか、薩長に偏りすぎだとか、いろいろ意見はあろうかと思いますが、それは生前の事績についてのこと。ここではただただ死んだからのことだけを取り上げてみました。「公文録」が人の死に方に詳しいのも



福井 ひとし (ふくい・ひとし) 氏

一九六二年三重県生、東京大学法学部卒、八五年から総務省、内閣官房、復興庁、沖縄総合事務局等に勤務。内閣府参事官として公文書管理法の制定に参画、その後、福岡大学教授、内閣審議官、国立公文書館理事、日本学術会議事務局長、迎賓館長を経て、二〇二二年から国立公文書館で首席研究官。役人時代、国会予算委員会で答弁、総理と米大統領を先導、そして今、両憲法の原本と毎日一緒に暮らしている、のが人生三大レガシー！（イラストも筆者）

驚きです。

如何でしょうか。「公文録」とか「太政類典」とか、これだけでごはん三杯ぐらい食べられそうでは。

彼らの死に方を見てみると、「易経」に出る「王臣蹇蹇」(ヲ—①)という言葉を思い出します。

「蹇蹇」は「行きなやみ、足がなえる」の意。彼らと同時代の陸奥宗光、西南の役の際の行動から、王臣として道を外れたかに疑われた彼の日記が「蹇蹇録」であるのは実に示唆的ですが、まことに王者に仕えるということとは、その栄光や誇りとともに、なんと苦し

みあふれることではないか。こんなのならやめとこう・・・と思うのですが、読者諸姉兄におかれては如何でしょうか。



ヲ—①「周易」巻四。魏の王弼注という古い注釈ですが、我が国で慶長一〇年、徳川家康のもとで出版された伏見版の古活字本です。かっこいい。もとの所有者は林家。左ページの四行目、

王臣蹇蹇 匪躬之故とあります。

王臣は蹇蹇たるも、躬の故に匪ず。

(王の臣下として正義を行う者は、行き悩み、足なえる。だがそれは自分のためではない。)

とのこと。

（参考資料）

本文中に明記した

司馬遼太郎「花神」（新潮文庫昭和51・赤松大麓「解説」）

一坂太郎「暗殺の幕末維新史」（中公新書2020）

一坂太郎「廣澤真臣ひろさわまことみの生涯」（春風文庫2024）

圭室諦成「横井小楠」（吉川弘文館人物叢書昭和42）

高村直助「小松帶刀」（吉川弘文館人物叢書2012）

のほか、

国立公文書館デジタルアーカイブ

アジア歴史資料センター・アジア歴グロッサリー

松尾正人「木戸孝允」（吉川弘文館「読みなおす日本史」2024）

浦辺登「明治四年・久留米藩難事件」（弦書房2023）

佐々木克「大久保利通と明治維新」（吉川弘文館・歴史文化ライブラリー
1998）

小川原正道「西南戦争」（中公新書2007）

江藤淳「完本 南洲残影」（文春学芸ライブラリー2016）

※国立公文書館のみなさん、いつもありがとうございます。特別感謝。